

## 見せることの研究と実践： 視覚の基礎研究と視覚デザインの対話

一川 誠

山口大学 工学部 感性デザイン工学科  
〒755-8611 山口県宇部市常盤台 2-16-1

視覚研究者にとって、「見せること」「魅すること」に関して、視覚芸術の歴史においてどのような配慮や工夫がなされてきたかを見ることによって様々な関心が刺激されることだろう。近年、多くの視覚研究者が視覚芸術作品と基礎視覚過程との関係についての文献を著していることはこのような強い興味を反映しているのであろう<sup>1-5)</sup>。

こうした文献に目を通すと、初期視覚過程の研究に関わる様々なトピックが、視覚芸術作品の物理的特性と関係して説明されているのを見ることができる。例えば、図と地の分化がエッシャーの作品<sup>1)</sup>と関連して説明され、線遠近法がキリコヤF・ベーコンの作品<sup>2)</sup>に関係づけて論じられている。また、V1の方向選択的ユニットがモンドリアンやマーレヴィチの抽象絵画<sup>3)</sup>やライリーのポップアート作品<sup>5)</sup>と関連づけて解説されている。

しかしながら、これらの文献を読んでも、視覚芸術の製作や視覚情報伝達においてどの映像要因をどう操作すれば、製作者の意図を観察者や鑑賞者に伝えることができるのか、明示的には示されていない。様々な映像を観察した際にどのような印象を受けるかといった視覚刺激の感性的効果や印象決定過程に関しては、研究成果を映像作品制作に利用できる形では示されていない。例えば、上述の文献では、感性的効果についての実験的研究はほとんど扱われていない。美的経験に対する8つの原則<sup>4)</sup>も、視覚皮質を特に強く興奮させる刺激属性が美学のプリミティブであるという大胆な主張<sup>5)</sup>も、その実

践的有効性については実験的検討による裏づけを得ているわけではない。

視覚における伝達や感性的効果に関するこうした問題は、視覚デザインの実践において解決を迫られている課題そのものである。視覚デザインの中心的関心は、視覚映像作品を用いて、観察者、鑑賞者に適切に情報を伝達すること、意図された印象を与えることである。見せることによって観察者に対しての効果を及ぼすことができるかにその仕事の成否がかかっている。ねらい通りの情報が伝達されなければ、意図した通りの印象を与えることができなければ、その仕事は失敗と見なされる危険がある。

視覚デザインを行う者(デザイナー)にとって、上述の文献で紹介されている視覚研究の成果の多くは隔靴搔痒で、問題を解決するのに利用できる情報はなかなか見つけられないのが現状であろう。国内では、近年、視覚刺激の感性的効果に関する実験心理学的研究の成果を紹介するテキストブックがいくつか出版されている<sup>6,7)</sup>。しかしながら、視覚デザインの実践における具体的方法論まで提示されているわけではない。

視覚研究がデザイナーと要求に答えることができなければ、彼らは、自らの経験に基づいて、試行錯誤のうちに作品方法論を構築するしかない。この現状は、デザインの現場における方法論の構築が、誰にでも利用できる、客観的な知識として蓄積されているという状況ではないことを意味している。

視覚における伝達や感性的効果に関する問題は、視覚デザインにとってのみ重要というわけ

ではないだろう。ある特定の情報を伝えるためには、どのような視覚刺激提示が適切であるのか？複数の色彩の組み合わせは観察者にどのような影響を及ぼすのか？ある絵を見て美しいと感じる人を増やすためには、どのような刺激操作を加えるべきなのか？多くの視覚研究者は、誰かがこれらの問いに対して答えている場面に出くわすと、その答えを得る方法が適切か、結論に至る論理に飛躍がないか、考えずにはおられないのではないだろうか？もしそうだとしたら、その視覚研究者は、これらの問題に興味を持っていると言っても間違いはないであろう。

実際、これらの問題を科学的手法によって解決することができれば、我々の生活の質の向上にも資するはずである。こうした問題に対し、視覚デザインの実践の現場からの要求に答える客観的知識を得るためには、視覚研究者と視覚デザイナーとの間の対話と共同作業が必要と思われる（上述の文献<sup>1-5)</sup>ではこの作業が欠けていたと言える）。視覚研究の成果により立てられた仮説をデザインの実践における要求に耐えられるよう修正・深化することが求められるだろうから、視覚研究とデザインとの間の交互作用により、見せることの研究と実践の新しい展開が可能になるのではないか。

このような期待のもと、このパネルディスカッションは、視覚研究とデザイン2つの分野の対話を目指して企画された。それぞれ独自の観点から「見せること」「魅すること」に関わる問題にアプローチされている3名の研究者に話題提供をお願いした。三浦先生には、静止画像の鑑賞に関する感性的特性に関する実験心理学的手法による最新の研究成果について紹介していただけるものと思う。具体的研究成果の中に、視

覚における感性的問題についての実験的研究の可能性を見ることができよう。小林先生は、視覚デザインにおける表現の問題について記号論的アプローチで研究されている。記号を用いた視覚情報伝達についての研究成果を紹介していただけるものと思う。木下先生は、デザイナーとして動画像制作をされており、近年は動画像の感性的効果について実験的手法により研究されている。デザイナーとしての動画像制作に関わる問題点の指摘や、最近の実験的研究の成果について紹介していただけるだろう。

視覚研究と視覚デザインとの共同作業の結果、視覚的伝達の実践において20年後、50年後にはどのようなことが可能になるのだろうか？この企画を通して、将来の見通しについて考える材料を提供できればと思う。

## 文 献

- 1) R. L. Solso: *Cognition and the visual arts*. MIT Press, New York, 1994.
- 2) J. Willats: *Art and representation*. Princeton University Press, Princeton, 1997.
- 3) S. M. Zeki: *Inner vision*. Oxford University Press, New York, 1999.
- 4) V. S. Ramachandran and W. Hirstein: The science of art: A neurological theory of aesthetic experience. *Journal of Consciousness Studies*, 6, 15-51, 1999.
- 5) R. Lattó: The brain of the beholder. R. Gregory, J. Harris, P. Heard and D. Rose (Eds.): *The artful eye*. Oxford University Press, New York, 1995.
- 6) 行場次朗, 箱田裕司(編著): 知性と感性の心理. 福村出版, 2000.
- 7) 大山 正: 視覚心理学への招待. サイエンス社, 東京, 2000.